

度教の主神濕婆 Siva と毘瑟笈 Vishnu とであつたので、國王の特別の信心に依つて、此の二神中何れかの大神殿の勸進があつたのである。例へば、アンコール・ワットでは、昔建物の頂に安置した像は、こゝに来る各階の階段四十が集る所になつてゐる小房にあつたが、之は、毘瑟笈像か、之と同一に見做されるパラマギシュヌローカ Paramavishnuloka 王の像とするのが最も眞に近い。蓋しこの半開の小國王は、神として祀られる名譽を得て居た事は、全くロマ皇帝に於けると同じであつた爲である。それでは、朝夕の印度人の禮拜時を除いて、神像は、この石造の三重になつた四角な牆壁の中央高所に淋しく安置されてゐた事になるかといへば、諸君は之を希はれない所であらうが、確かに、印度の神殿には、日本の金堂や歐洲の會堂の如き廣間を信者の爲に造つたのは嘗て見ない。けれども、兎も角、寒さを知らないカンボヂアの氣候では、何れの時を問はず、其の長い歩廊や、其の隅々の建物が、廷臣や、賤しい巡禮の休み場になつてゐたので、近年修理を経たアンコール・ワットで行はれた土地の大祭を見たが、之で、往時この大牆壁の内に呈した活躍の光景を思ひ浮